

## 二次育苗体系による「よつぼし」の促成栽培

試験研究計画名：種子繁殖型イチゴ品種「よつぼし」の全国展開に向けた省力栽培体系とICTによる生産者ネットワークの確立

地域戦略名：種子繁殖型イチゴの省力栽培体系と生産者ネットワークの確立による新しいイチゴ経営の展開

研究代表機関名：三重県農業研究所

### 地域の競争力強化に向けた技術開発のねらい

種子繁殖型品種では、増殖効率が高く、栄養繁殖の際に生じる親株から子株への病害虫感染を回避でき、それゆえ、苗生産の分業化が可能なが大きなメリットになります。このメリットを活かしながら、従来品種に近い栽培体系を組むことができれば、従来からの知識を活かしやすく、生産者にとって取り組みやすい技術になります。そこで、我が国イチゴ生産の主要作型である促成栽培ポット育苗法に準じ、購入したセル苗からポット育苗に移行する「二次育苗体系」を確立しました。

### 開発技術の特性と効果：

慣行の促成栽培ポット育苗法では、前年から準備した親株を4月に植えます。それから発生するランナー子株をポットに鉢受けし、切り離してポットで育苗し、花芽分化させてから9月に本圃に定植します。これに対し、種子繁殖型品種の二次育苗体系（表1）では、種苗事業者が育てた406穴セル苗を、生産者が7月前半に購入し、育苗ポットに鉢上げして二次育苗します。8月下旬までにクラウン径8mm以上に育て、その後は、慣行ポット栽培と同様に、窒素中断により花成誘導し、9月20日頃に花芽分化開始した株を本圃に定植します（写真1、表2）。これにより、11月下旬頃から翌春まで収穫できます。

この体系では、病害虫伝染のリスクが大きく低下し、育苗労力が31%削減されます。慣行に近い安定した栽培方法のため、一般的な生産者のほか、栽培初心者でも取り組みやすい体系です。

表1. 「よつぼし」二次育苗体系の作型図

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
						鉢上	育苗					
収穫								定植	.....			収穫



写真1. 鉢上げ時のセル苗（左）、二次育苗（中）と定植方法（右）

表2. 定植時期の目安：極早生性品種「かおり野」と比較した定植日別の出蕾株率の変化

定植日	品種名	調査日別出蕾株率										
		10/2	10/9	10/16	10/23	10/30	11/6	11/13	11/20	11/27	12/4	12/11
8/28	かおり野	0	0	0	0	79	93	100	100	100	100	100
	よつぼし	0	0	0	0	14	64	79	100	100	100	100
9/4	かおり野	0	0	0	0	54	85	100	100	100	100	100
	よつぼし	0	0	0	0	21	79	93	93	93	100	100
9/11	かおり野	0	29	71	71	79	100	100	100	100	100	100
	よつぼし	0	50	64	64	86	100	100	100	100	100	100
9/18	かおり野	0	0	79	100	100	100	100	100	100	100	100
	よつぼし	0	14	93	100	100	100	100	100	100	100	100

かおり野は、9cmポット鉢受け。8/3ランナー切除。窒素中断なし(最終液肥9/10)。

よつぼしは、5/15播種。6/19に9cmポット鉢上げ。7/18緩効性肥料施肥後、施肥なし。

「よつぼし」、「かおり野」とも、9/18には全株が花芽分化している。花芽分化しないうちに定植した株は出蕾が遅れる。

### 開発技術の経済性：

親株の管理やランナー受けの必要がなく、セル苗の鉢上げ作業は容易で、育苗期間も短くなります。定植まで含めても、育苗作業の労働時間は31%削減され、種苗を購入するため種苗コストが増しますが、育苗労力軽減分を収穫期間の延長にあて、その増収効果で慣行に比べ、10a当たり47万円程度の農業所得増と試算されました(表3)。

### こんな経営、こんな地域におすすめ：

促成栽培向けの早生性品種で、西南暖地の促成栽培地域に適します。従来品種の慣行栽培に近い安定した栽培方法で、一般的な生産者のほか、栽培初心者でも取り組みやすい体系です。食味が優れるので観光農園や産直農家でも人気の高い商品になり、都市近郊農家で苗を購入して果実生産だけを行う経営形態や、大規模経営において労力の分散を狙いとする場合にも適します。

### 技術導入にあたっての留意点：

鉢上げ直後の苗は小さく、その後の成長が何らかの原因でよくないときには、窒素中断の開始を遅らせてでも、花芽分化開始までに十分な大きさの株に育てる必要があります。また、種子繁殖のため栽培初めには病害虫感染がほとんどありませんが、成長過程での感染リスクは従来品種と同じで、従来品種と同様に病害虫の予防と防除に努める必要があります。

### 研究担当機関名：

三重県農業研究所、岩手県農業研究センター、富山県農林水産総合技術センター園芸研究所、山口県農林総合技術センター、香川県農業試験場、三好アグリテック(株)、(研)農研機構九州沖縄農業研究センター、(NPO)東海地域生物系先端技術研究会

お問い合わせは：(一社)種子繁殖型イチゴ研究会

電話 050-3754-5376(平日9:00~17:00)

E-mail ichigo01@seedstrawberry.com

執筆分担(三重県農業研究所 森利樹)

表3. 二次育苗体系の10a当たり経済性の試算結果

区分	項目	従来品種慣行栽培	二次育苗体系
収入	生産物収量(kg)	3,800	5,018
	主産物収益	4,544,327	5,600,691
経営費	種苗費	25,920	420,000
	肥料費	65,075	63,175
	農薬費	137,522	136,354
	諸材料費	512,798	449,037
	光熱・動力費	227,175	227,175
	小農具費	25,000	25,000
	修繕費	238,642	238,642
	賃借料	38,000	48,000
	減価償却費	1,201,741	1,201,741
	共済掛金	21,000	21,000
	雇用労賃	331,300	349,125
	小計	2,824,172	3,179,248
	出荷経費	863,222	1,093,647
合計	3,687,394	4,272,895	
農業所得	856,933	1,327,796	
農業所得率(%)	18.9%	23.7%	